

統計処理には上位検定としてカイ二乗検定をおこない、有意差が見られた場合、下位検定として残差分析をおこなった。

Ⅲ. 結果

1. アシストパスを受けた位置

アシストパスを受けた位置は G-L : 1, 245 本, G-M : 606 本, G-R : 1, 279 本となった. カイ二乗検定の結果, 1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=275.529$, $df=2$, $p=0.000$).

2. アシストパスを出した位置

1) フィールドを縦に 3 分割したとき

アシストパスを出した位置は, L : 1, 096, M : 845, R : 1, 189 となった. カイ二乗検定の結果, 1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=60.698$, $df=2$, $p=0.000$).

2) フィールドを横に 4 分割したとき

アシストパスを出した位置は A : 1, 805, B : 729, C : 505, D : 91 となった. カイ二乗検定の結果, 1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=2049.261$, $df=3$, $p=0.000$).

3) フィールドを 12 分割したとき

アシストパスを出した位置を表 1 に示す.

表 1. フィールドを 12 分割した時のアシストパスを出した位置

		フィールド位置 (横)			合計
		L	M	R	
フィールド位置 (縦)	A	643	520	642	1805
	B	256	168	305	729
	C	171	116	218	505
	D	26	41	24	91
	合計	1096	845	1189	

カイ二乗検定の結果, 1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=34.237$, $df=6$, $p=.000$).

Ⅳ. 考察

1. アシストパスを受けた位置について

アルティメットにおいて, ディフェンスは相手をサイドライン側に追い込む戦術を頻繁に用いている. そのため, オフェンスがディフェンスによる影響を受けた結果, サイドライン側へのアシストパスが多い傾向がみられたと考えられる.

2. アシストパスを出した位置について

アシストパスを出した位置も, 受けた位置と同様に両サイドライン側の位置に多い傾向がみられた. これは, アルティメットにおいて用いられる主要なオフェンス陣形であるバーティカルス

タックとホリゾンタルスタックの影響であると考えられる. これらの陣形において中央の位置 (M) でディスクを保持した場合, ディフェンスやスタックの位置に阻まれ, ディスクを前進させることが難しく, 横方向に展開するプレーになっていると考えられる. また, エンドゾーンへ近づくにつれてアシストパスが多くなっており, より距離の短いパスがアシストパスに用いられていると考えられる. 距離の短いパスは, 長いパスと比較してコントロールが容易であり, ディフェンスが最も警戒する得点の場面においても, ブロックやインターセプトを受けにくくなっていると考えられる.

また, バスケットボールにおいてはバスケットの近くではゴールする確率が高い (Wooten, 1994) と述べられており, アメリカンフットボールでは, エンドゾーンから 40 ヤードから 20 ヤードまでの間を「スコアリングゾーン」と呼び, 事前に準備したスコアリング・プレーによって得点を狙うと述べられている. エンドゾーンに近づくにつれてアシストパス, つまり得点が増えることが他の競技からも示唆されている. また, フィールドの左側から出されたアシストパスはバックハンド, 右側から出されたアシストパスはフォアハンドが多くなっていたことから, アシストパスの位置と種類には関連があると考えられる.

Ⅴ. 結論

本研究ではアシストパスを出した位置と受けた位置の傾向を明らかにすることを目的とした. その結果, アシストパスがエンドゾーンの両サイドライン側の位置で多く受けられていること, エンドゾーンへの距離が近づくにつれてアシストパスが多くなっていることがわかり, アルティメットにおけるアシストパスの一端を明らかにすることができた.

今後, アシストパスの位置ごとの試行数や成功率について調査を進めることにより, より効率的に得点できる位置が明らかになると考えられる.